

# 「日本写真保存センター」調査活動報告(18)

多様な表現の写真 ―収集・保存した写真原板から―

松本 徳彦 (副会長)

「写真保存センター」の調査研究を始めて8年になる。この間に収集・保存した写真原板数は91,211本に及ぶ。ただこの数字は35ミリのネガフォルダーに換算しての数字なので、実際のコマ数はこの数倍以上になる。

収集した写真原板は劣化の有無を調べ、原板のデータベース資料を記録したのち、クリーニングして、中性紙の包材に交換して保存することになる。実に大変な作業で、根気と費用のかかる仕事である。「写真は社会の動向を記録し、後世に役立たせる働きをするもの」との命題を合い言葉にして活動している。

## ●田中徳太郎 (1909～1989)

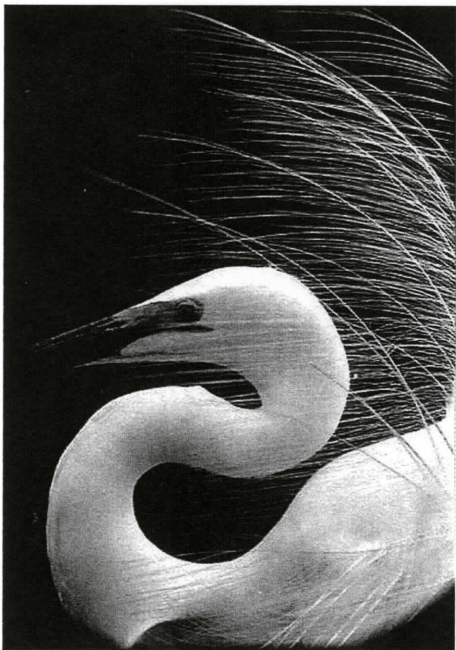
### 象徴的な日本の美意識「白さぎ」

東京から北にわずか30kmのさいたま市見沼区に、かつては緑豊かな水田が広がっていた。いまは大東京のベッドタウンと化し都市開発が進んでいる。

この地に東南アジアから飛来する野田のサギ山があった。1954年ころ元国鉄職員だった田中徳太郎はこの白サギの美しさに魅かれて、サギの生態記録を始めるが大きく撮れない。やむなく近所の町工場に頼んで1000mmの望遠レンズを製作してもらい撮り続けるがまだ十分とはいえず、サギが巣作りをしている農家の庭先に高さ10mの櫓を立て、頂上に萱で囲った小部屋を造り辛抱強く待ち続け、会心の1枚を撮影し小西六ギャラリーで個展をした。ライフ誌、ニューヨークタイムスで紹介され、一躍海外デビューし、MOMAやメトロポリタン美術館のコレクションにとントン拍子で評価される。ベニ

スビエンナーレやフランスモンペリエ国際展でアンドレ・マルロー文化大臣賞を受けるなど、シラサギの緻密な生態記録と気品のある美しい表現が高く評価される。

撮影櫓もさらに高く20mにまでなり、性能のよい1500mmのレンズと相まって、サギの魅力を存分に引き出せるようになった。写真集も立て続けに発行され、そのファンタジーあふれる写真は世界の頂点を極めた。679本収蔵。



## ●佐藤明 (1930～2002)

### 斬新なイメージの「冷たいサンセット」



1930年東京に生まれる。麻布小学校から府立一中(日比谷高校)と秀才コースを経て、横浜国立大へ。この頃から写真熱が高まり、図書館で海外の雑誌を読みふけり服飾モード誌に関心を深める。55年創刊間もなくの『サンケイカメラ』誌に心象的な作品を発表。奈良原一高、東松照明、細江英公らとVIVOを結成。婦人誌でファッションやスターの写真を撮る。60年『カメラ毎日』に「冷たいサンセット」を発表し、斬新な表現が話題を呼ぶ。その後「サイクロピアン」を連載。吉村伸哉は「佐藤のポートレートは、鋭角をもった氷の結晶のように冷たくみえて、内側ではなにかが熱く燃えさかっている」(カメラ時代66年)と繊細で潇洒なイメージと評している。ロマンティックな耽美な美意識や精神性はどこから生まれたものだろう。学生時代にうけたアメリカナイズされた象徴的でモダンなイメージによる影響が大きい。さまざまな試行を繰り返し到達したのが、広角レンズによる誇張されたイメージ、多重露光によるイメージの合成、映像的手法を生んだ。きわめて革新的な手法がそののちに誕生する横須賀功光や篠山紀信、大倉舜二らに影響を与え、華麗なテクニシャンとも言われていた。7,107本収蔵。

## ●恒成一訓 (1920～1999)

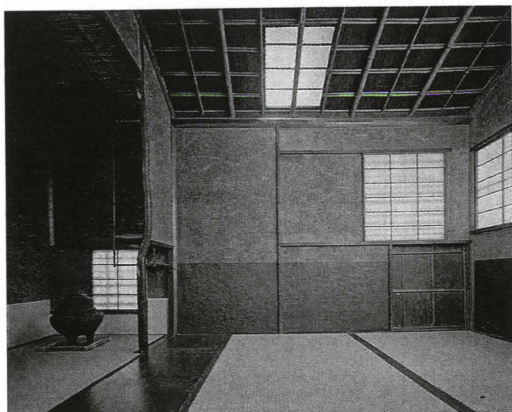
### 「銀閣寺東求堂の四畳半の茶室」

福岡県に生まれ、東京工業大学建築科を卒業。特別研究生として都市計画を専攻する。著書に「日本の庭園」、



「小堀遠州」、「書院」、「角屋」、「数寄屋造り」がある。と書く写真家というよりも和風建築の大家であることが分かる。

では写真が趣味かと思われるが、とんでもない。大型カメラを巧みに使いこなす完璧な建築写真家である。



建築史家の森蒔氏によれば「数寄屋造りは室町時代にまで遡る」といわれ、「茶室建築については奈良の称名寺に起因する」といわれるほど、古い歴史がある。恒成一訓は大学で建築学を専攻し、専門教育を学んだ建築家である。その恒成が和風建築の大家として知られるようになったのは、専門知識を身に付け建築の要所を的確に捉えているところに、専門家の評価が定まり、多くの専門書を手がけることになった。和風建築は現代建築と違って、木材の素材や自然の形・肌合いを生かすところに特色があり、その自然との調和や端正な空間美が如何なく表現されているところが、研究者にとっては作品として以上に、資料としての価値を認める。撮影記録も整っていて、写真保存センターにとっても貴重な写真原板である。2,564 本収蔵。

### ●石橋寿子 (1949 ~ 1985)

#### 「北と東の人間録」から「函館の朝市」

ひたむきな目で故郷北海道から東京の下町の人々と接しながら人生を見つめ、人間とは何かを問い続け、夭折した女流写真家。

北海道から本土へは函館、青森間の鉄道連絡船で行き来した。連絡船では畳み敷きの船室に、老若男女が大きな荷物をもったおばさんから子連れの夫婦、出稼ぎのおじさん達が雑魚寝している。さまざまな人たちで船室



はあふれている。港に着くとどちらにも大きな市場がある。函館の港は何と言っても鮭や毛蟹、イカなどの新鮮な魚類を売るおばさん達が甲高い声で客の獲得競争だ。一方、青森側では青果物やリンゴの売り場が賑わっている。赤く色づいたリンゴを割って食べさせ土産物を売る。そんな人たちの輪に混じって会話をしながら写真を撮る。実にエネルギーに対象に迫り撮りまくる。男でも出来そうもないことをやってのける気迫の人だ。人の心をとらえる天性の才能があるのだろう。彼女によれば出会いの瞬間と自分の直感を大切に撮っているという。

函館の朝市もその典型であろう。東京に来てからも浅草、上野、佃島などの人情味のある下町風情に興味を抱き、人間の生き方を追い求めていた。リアリティーのある作品群が夫の神山洋一と師匠にあたる英伸三、橋本紘二らによって写真集『北と東の人間録』(1985 年)として刊行されている。520 本収蔵。

### ●秋山忠右 (1941 ~ 2013)

#### 「大東京空撮」より「稲毛の団地群」(カラー)

秋山は早稲田大学政経学部を経て東京総合写真専門学校で学ぶ。当初は若者で賑わう銀座みゆき通りに集まる通称「みゆき族」をテーマにした「若者たちの群像」シリーズでデビュー。友人の佐藤晴雄との共作「人間砂漠」、「區」、「周縁遊歩」などを発表。地図出版社の仕事で東京巨大都市をヘリコプターで撮る。

都市が肥大化し古くからの町が次々と壊され、巨大ビル群が誕生するありさまを「ヘリ目、ゴジラ目」と表現した。

細々とした木造家屋が集まる入り組んだ路地から、幾何学的構成の新生都市へと変貌する姿が、あるときは造型美として、季節による色合い、自然美として捉えられている。路上の人物では見ることでできなかったものが、空中からは意外な物体として見え、その不思議な様相が手にとるように見られる玉手箱のようだ。大東京の空中散歩読本として楽しめる。まさにゴジラ目に相応しい内容である。4,529 本収蔵。

